

第 章

教育の実施体制

第 章 教育の実施体制

第1節 教 員 組 織

1. 専任教員数

図表 13 に本短期大学部における専任教員数一覧表を示す。また短大専攻科の教員は短期大学部の教員が兼担することになっている。

図表 13 専任教員数一覧表

(2004年4月1日時点)

専攻名	専任教員数				設置基準で定める 教員数			助 手	(二)
	教 授	助教授	講 師	計	(イ)	(ロ)	(ハ)		
作曲専攻	3	2	0	5	5	5	-	0	0
声楽専攻	4	2	2	8	5		-	0	0
器楽専攻	6	5	4	15	8		-	0	0
J P 専攻	6	2	1	9	7		-	0	0
一般教育	1	1	0	2	-		-	0	0
外国語	1	1	0	2	-		-	0	0
保健体育	1	0	0	1	-		-	0	0
合 計	22	13	7	42	25	5	-	0	0
教 職 *	2	1	0	3	-	-	2	0	0

イ：短大設置基準第22条別表第1のイに定める学科の種類に応じて定める専任定員数（3割以上は教授）

ロ：短大設置基準第22条別表第1のロに定める短期大学全体の入学定員に応じて定める専任定員数（3割以上は教授）

ハ：教員免許課程認定審査基準による必要教員数（1名以上は教授）

二：教育研究活動に直接従事する教職員（例：副手、補助職員、技術職員等）

* 教職に関する科目（教職の教科に関する科目担当（教員数3名以上、兼任可、1名以上は教授）を除く）

2. 教員の採用と昇任

教員採用、昇任（本学では昇格）にあたっては、各専攻の教員集団（本学では部会と呼称）から、提案が人事委員長を通じて人事委員会に上程され審議を経たのち、教授会さらに理事会の審議を経た後決定される。なお、採用募集は公募が原則である。

以下に示す「大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部専任教員採用選考基準」の具体的基準は人事委員会において定めている。

採用計画

人事委員会は理事会の定める基本的な教員採用計画を基に、以下の事項を決定する。

(ア) 採用する職及び専門分野・科目

(イ) 専門選考委員会（原則として専門分野の教員により構成する）の設置

(ウ) 公募の内容及び方法（公募以外の方法で採用する場合はその理由）

専任教員の選考基準

大学における教育を担当するにふさわしい専門分野でのすぐれた能力と教員としての資質双方を備えた者。

・専任講師

業績及び一定期間の専門的研究又は専門的教育の経歴を有し、本学の専任教員としての学識及び識見を備えた者。

・助教授

教授に準じて学生を教授し、その研究を指導し又は研究に従事する能力を十分に備えた者。図表 14 に定める昇格基準による講師から助教授への昇格基準を準用し、総合的に判定。

・教授

学生を教授し、その研究を指導し又は研究に従事する能力を十分に備えた者。図表 15 に定める昇格基準による助教授から教授への昇格基準を準用し、総合的に判定。

専任教員の昇格

人事委員会は、専任講師から助教授への昇格及び助教授から教授への昇格の推薦候補者について審議し、教授会への推薦者を決定する。

昇格の審査基準は原則として以下の通り。

(1) 専任講師から助教授への推薦候補者となるためには、原則として専任講師歴 3 年、助教授から教授への推薦候補者となるためには原則として助教授歴 5 年、をそれぞれ必要とする。

(2) 業績の評価が推薦される職にふさわしいものであること。なお業績の評価基準に関しては図表 14（専任講師から助教授）及び図表 15（助教授から教授）の基準例示を基本とする。なおこの図表の内容は適宜、人事委員会において見直し、必要な場合は本基準 1 の改正手続きにより昇格基準の改定を行うものとする。図表 16 に選考の流れを示す。

(3) 教育・研究に接続する社会活動が認められること。社会活動の評価項目については図表 17（専任講師から助教授、助教授から教授へ共通）の項目例示を基本とする。この図表の見直しについては(2)と同様とする。

(4) 教育活動に成果が認められること。教育活動の評価項目については図表 18（専任講師から助教授、助教授から教授へ共通）の項目例示を基本とする。なおこの活動には個人の場合と共同の場合を含む。この図表の見直しについては(2)と同様とする。

(5) 例示のような大学運営活動に積極的に参加していること。

- ・各種委員、大学役職者などにより大学に貢献した
- ・アドミッション、エクステンション、国際交流等における顕著な活動
- ・大学主催の行事・企画などの計画・実施
- ・大学作成の出版物、レコード（CD、テープ等を含む）の作成 など

以上の5項目のうち、(1)(2)の条件を満たし、なお且つ(3)～(5)についても十分に評価に値する内容を有する候補者について、昇格を推薦するものとしている。

図表 14 業績の判定基準例示（講師から助教授へ）

論文・著書等	投稿論文の場合、査読を経て掲載されるもの	3本以上
	学会あるいは出版社などから依頼された論文	3本以上
	査読（ジャッジ）のない論文の場合、学会等での研究発表	上述の2倍以上
	単著の場合 1冊以上 共著の場合は査読を経た論文に準ずる（私費出版は1/2評価）	
以上の例示に準ずるもの		
演奏・創作等	器楽、声楽ソロ・リサイタル、指揮、作品発表、自主開催等	3本以上
	オペラの場合は、オーディションなどを経て主役級を歌った場合。室内楽の場合は、その演奏会の主宰者兼主たる演奏者であって全プログラムに出演した場合（例えばピアノ三重奏や弦楽四重奏などの各奏者）のうち、何らかの賞を得たもの、あるいは公的雑誌、新聞等でしかるべき評価を得たもの	
	社会的評価のある団体からの依頼公演、委嘱作曲の場合（公演内容は、上に準ずる）	3本以上
	上述のものに当たらない自主演奏会、自主作品発表会（オペラの場合は準主役級、室内学の場合は全プログラムの1/2以上）の場合	6公演以上
以上の例示に準ずるもの		

論文・著書等と演奏・創作等の各分野に及び場合は本基準を基に総合的に判定する。

図表 15 業績の判定基準例示（助教授から教授へ）

論文・著書等	投稿論文の場合、査読を経て掲載されるもの	5本以上
	学会あるいは出版社などからの依頼論文の場合	5本以上
	査読（ジャッジ）のない論文の場合、学会等での研究発表	上述の2倍以上
	単著の場合 2冊以上 共著の場合は査読を経た論文に準ずる（私費出版は1/2評価）	
以上の例示に準ずるもの		
演奏・創作等	器楽、声楽ソロ・リサイタル、指揮、作品発表、自主開催等	5本以上
	オペラの場合は、オーディションなどを経て主役級を歌った場合。室内楽の場合は、その演奏会の主宰者兼主たる演奏者であって全プログラムに出演した場合（例えばピアノ三重奏や弦楽四重奏などの各奏者）のうち、何らかの賞を得たもの、あるいは公的雑誌、新聞等でしかるべき評価を得たもの	
	社会的評価のある団体からの依頼公演、委嘱作曲	5本以上
	上述のものに当たらない自主演奏会、自主作品発表会（オペラの場合は準主役級、室内学の場合は全プログラムの12以上出演）	10公演以上
以上の例示に準ずるもの		

論文・著書等と演奏・創作等の各分野に及び場合は本基準を基に総合的に判定する。

図表 16 選考の流れ

(2005年3月17日施行から抜粋)

第一次審査：書類選考

専門選考委員会 + 人事委員会委員

第二次審査：専門分野の能力

専門選考委員会 + 人事委員会委員

審査経過並びにその結果を人事委員会に報告。

第三次審査：面接・モデル授業等

副学長を含む過半数の人事委員 + 専門選考委員会

候補者を人事委員会に具申。

人事委員会において、教授会に推薦する採用候補者を決定。

教授会において承認。

図表 17 社会活動評価項目例示

社会的評価のあるコンクールの審査員活動 社会的評価のある団体からの依頼による公開講座 社会的に認められた雑誌、新聞などにおける小評論、批評などの活動 学会の委員、理事などの役職活動 演奏団体の理事などの役職活動 公的機関からの依頼による各種審議機関の審議委員、評議員 社会的評価のある団体などからの依頼による講演、解説、シンポジウムやラウンド テーブルなどの司会、企画などの活動 市民表彰などの公的機関からの表彰、受賞 以上の例示に準ずるもの
--

図表 18 教育活動の実践項目例示

教育方法の実践例示	優れた教育・指導方法の実践例 優れた双方向的な授業の展開 学生の授業時間外の学修を促進する取組 マルチメディア機器を活用した優れた授業方法の開発 学生の修学意欲を高める授業・レッスンの展開 数値目標を掲げた授業・レッスンの展開 授業科目についての新たな成績評価方法の開発 以上の外、学内、あるいは一般社会などにおいて、その教育活動が高く評価されたもの 指導した学生のコンクールにおける入賞 など
書作成した教材等	優れた教科書の作成 優れた教材用オリジナル楽譜、編曲等 演習授業等の新たな展開システムの作成 今後その分野において活用しうる新たに開発した教材

3. 専任教員の年齢構成

本学の専任教員の年齢構成（2004年度4月1日）を図表19に示す。

専任教員の定年は現在満68歳となっている。専任教員の年齢構成は52.3歳の通りである。これによれば、音楽科の専任教員45名の年齢構成は30代が15.6%、40代が20.0%、50代が28.9%、60代が35.6%となっており、60代が最も大きな割合を占めている。

60歳以上の年齢層へ偏りがみられ、専任教員の定年が68歳であることから今後10年の間に退職となる59歳以上の専任教員が半数近くを占めている。即ち近い将来には現在の専任教員に明らかな世代交代が行なわれる事となる。本学の教育理念、目的の維持、推進のためには学生数の変動や短大改革などを睨みながら適切な教員配置を施すために中・長期的な教員採用計画が必要である。

図表19 専任教員の年齢構成（2004年度4月1日）

教員数	年齢毎の専任教員数（講師以上）						平均年齢
	70以上	60～69	50～59	40～49	30～39	29以下	
45	0	16	13	9	7	0	52.3歳

4. 専任教員の業務取組み状況

専任教員は教育、研究、大学運営、社会連携等の業務に総じて真剣に取り組んでいると考えている。短期大学の場合、教育組織としての役割が特に強く求められている事情もあり、概して授業に対する取り組みに注力する傾向がある。もちろん、各個人の研究成果等も毎年、所定の様式に記入し研究業績として提出している。なお、音楽大学という性格上、実技担当教員が多く、学生と1対1で向き合う場合が中心であるため、“授業”、“研究”、“学生指導”はかなりの部分で渾然一体になっている。

- ・専任教員の総担当コマ数：197コマ（短大総コマ数：326コマ）
- ・専任教員の基準担当コマ数：演習を含む講義系：6コマ 実技レッスン：7コマ
- ・専任教員の平均担当コマ数：7.76コマ（併設大学担当コマを含んだ数）
- ・教員の研究業績：毎年提出
- ・教員が参画する学生指導の業務：教育実習校訪問指導
インターンシップ特別実習
各種演奏会実施時に於ける指導
- ・教員が参画する教育研究上の業務：短期大学部運営会議（学生の教育に関わる全事項を扱う）
実技試験に於ける採点
大学の管理運営業務
教授会（教授、助教授、専任講師）
定期試験審査
入試業務

5. 教育助手、副手、補助職員、技術職員の配置

本学には学校教育法に定められる助手とは別に、教育助手（非常勤）をおいている。これは本学の音楽系単科の短期大学としての独自性を基に制度として設置したものである。教育助手（非常勤）については授業運営の補助業務を行うことを目的として配置されており、主として合奏等の授業において演奏補助及び授業準備の補助などの業務を行う。その他にも入学試験や在学生の試験等において補助員としての業務を行う。なお、大学、短期大学の兼任となっている。伴奏助手（非常勤）は合唱、指揮法等の教職必修科目において伴奏業務にあたり、主に本学をはじめ、本法人内に併設されている短大専攻科や音楽学部、学部専攻科、大学院のピアノや音楽学（旧楽理）作曲等の出身者から、選考を経て採用している。技術職員としては、デスクトップ・ミュージックの補助としてコンピュータの専門家などを配しているなど、現状では（2005年度まで）基本的に教員の要求を可能な限り受け入れて教育助手や技術員を配置している。

本学の器楽専攻の特徴的な授業として設置される管弦打における同属楽器によるアンサンブル（オーケストラ）等や、オーケストラ、吹奏楽といった合奏系授業の演奏補助的な業務では、学生にとって技術的負担が大きいと考えられる特殊な楽器等の演奏、授業において使用する教材等の準備の補助などが教育助手の主業務となる。しかしながら、大規模な合奏等では折に触れて分奏を行うなど、学生相互による自学自習的な要素も多くあり、この場面でのアドバイスを行うなどのティーチングアシスタント的な業務に推移することも今後考えられる。その一方で、伴奏助手としての業務は実質的には、伴奏の技能を必要とすることから、その意味においては将来的にも一層の高い技術を持ち、教育の一端を担うほどの人材が必要になるとも言える。これは仮に演奏要員などの専門技術職員としての採用も今後考える必要があるように思われる。2006年度からは教育助手・演奏員・技術員などが授業内容とどのように関わっているかなどを抜本的に見直し、学生により質の高い教育を提供するため必要不可欠であると認められた授業に配置する新体制を発足させる予定である。

第2節 教育環境

1. 校地と教育環境としての適切性

1954年（昭和29年）に、豊能郡庄内町野田（現、豊中市庄内幸町）に校地9,944m²を取得し、味原町（現、天王寺区味原本町）から移転し現校地となっている。現在では、大阪音楽大学、大学専攻科、短大専攻科、大学院音楽研究科、が同じ敷地に開校されている。また、第1キャンパスから東へ徒歩約20分のところに、4棟（A～D棟）の学生寮、付属音楽幼稚園が設置されている。箕面市下止久呂美の山中には、セミナーハウス風の学舎である箕面学舎が設置されている。本学は都市部に立地する音楽大学であり、音楽活動が集中する人口密集地域にキャンパスを持つことは、社会から演奏を評価して貰う機会と、学生が社会から音楽的刺激を得る機会との両面で有利であると言える。都市部に位置する場合に生じる自然環境不足には、箕面学舎を設置することによって対応している。このことにより、本学では都会的環境からの音楽的刺激のみではなく、自然の中に存在する音を感じることもできる調和

のとれた教育環境を有している。

文部省届出面積（1999年1月13日届出）を図表20、大阪府届出面積（2003年6月届出）を図表21にそれぞれ示す。

本学校地は67,676.78m²であり、寄宿舍、幼稚園が設置されている豊南校地、箕面学舎がある箕面校地、ザ・カレッジ・オペラハウスを含む西町校地を除いた本学校地は26,129.78m²となる。本学の収容定員は、大学院20名、大学専攻10名、大学900名、短大専攻科15名、短大600名、合計1545名である。短期大学設置基準では、学生定員上の学生一人当たり10m²となっており基準上必要とされる600名×10m²=6,000m²（全ての学生に対しては、1545名×10m²=15,450m²）を上回っている。

校舎面積は46,752.08m²（幼稚園を除く）であり、ザ・カレッジ・オペラハウス（延面積5,489.39m²）、図書館（延面積879m²）、寄宿舍（延面積2,944.11m²）、箕面学舎（延面積492.98m²）を除いた校舎面積は36,946.6m²である。これらは設置基準上必要とされる短大の校舎面積4,950m²（全ての学生に対しては、12,150m²）を上回っている。

図表20 校地面積

校地届出面積 < 1999年1月13日 >

67,828.00m²

	名称	所在地	面積 (m ²)	備考
自 有 地	庄内校地	〒561-8555 豊中市庄内幸町1-1-8	9,943.59	大学、大学専攻科、短大専攻科、大学院と共有
	西町校地	〒561-0832 豊中市庄内西町 1-16-1、16-3 (ザ・カレッジ・オペラハウス) 〒561-0832 豊中市庄内西町1-24-2、 25、33、34-1	4,183.53	同上
	野田校地	〒561-0855 豊中市野田町36-1	9,015.19	同上
	名神口校地	〒561-0841 豊中市名神口1-4-1	7,171.00	同上
	豊南校地	〒561-0814 豊中市豊南町東1-5-1	4,509.47	同上
	箕面校地	〒563-0252 箕面市下止々呂美520-1	32,854.00	同上
	計		67,676.78m ²	
借 地	西町借地	豊中市庄内西町1-23-2 (チケットOCM)	151.22	同上
	計		151.22m ²	

校舎届出面積 < 2001年1月16日 >

46,752.08m²

図表 21 大阪府届出面積 < 幼稚園 > < 2003 年 6 月 >

校地届出面積 (自有地 : 豊南校地)	4,139.01m ²
校舎届出面積	1,713.81m ²

以下に教育研究活動が主に行われている、第 1 キャンパス、第 2 キャンパスにおける施設概要を示す。

第 1 キャンパス (庄内校地)

- ・ A 号館 : 学務センター、エクステンション・センター、事務局、教室、レッスン室
- ・ B 号館 : 教室、レッスン室
- ・ C 号館 : 図書館、教室、レッスン室
- ・ D 号館 : 試聴室、視聴覚室、教室、レッスン室
- ・ E 号館 : 練習室、クラブ用部室
- ・ F 号館 : 演習室、教室、レッスン室、研究室、練習室
- ・ G 号館 : 学生自治会室、練習室
- ・ H 号館 : 教員研究室
- ・ 学生サロン「ぼうぜ」
- ・ 入試広報デスク

(西町校地)

- ・ ザ・カレッジ・オペラハウス
- ・ チケット OCM・広報室

(野田校地)

- ・ O 号館 : 演習室、教室、レッスン室、研究室、練習室
- ・ P 号館 : 音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」、大学院研究室、レッスン室 (兼練習室)

第 2 キャンパス (名神口校地)

- ・ K 号館 : 音楽博物館、録音スタジオ、ジャズ・ポピュラースタジオ、体育館 (若人広場)、演習室、パイプオルガン室、教室、レッスン室、練習室、食堂、サロン

体育実技の為に体育館 (K 号館) と、全キャンパス内に約 40,632m² の運動場を備えている。現在、運動場の一部はテニスコートとして整備され、他は駐車場及び休息空間 (中庭) と兼ねている。

ザ・カレッジ・オペラハウス、音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」、図書館、音楽博物館、録音スタジオ、ジャズ・ポピュラースタジオについての詳細は、本章第 3 節 1 . ザ・カレッジ・オペラハウス ~ 6 . ジャズ・ポピュラースタジオで説明する。また、学生サロン「ぼうぜ」、食堂、保健室については、第 3 章第 3 節 3 . キャンパス・アメニティへの配慮にて詳細を報告する。

2. 情報機器及び授業用の機器・備品の設備

教育研究に係る情報機器の整備

図表 22、図表 23 に情報機器等の設置・整備・使用状況一覧と学内 LAN の整備状況をそれぞれ示す。

2002 年春、K 号館の 1 階(K118)に従来の広さの倍に拡張したコンピュータ設置教室(DTM 教室)が設置された。これに伴い、コンピュータ、音源モジュールも 12 台増設し従来以上の台数を使用したコンピュータを使った授業が可能となった。また、MIDI のキーボードは既設置分も含め 24 台全て新規導入した。コンピュータ機種は全て iMac で、コンピュータを使用したデスクトップ・ミュージック演習、コンピュータ音楽研究に活用されている。授業では、学生が 1 人 1 台使用でき、自動編曲システムやシーケンスソフトなど、音楽製作に必要な基礎知識が学べるようになっている。同館 5 階(K504)には Windows 起動のコンピュータ 20 台を設置し、DTM を学ぶことが出来るようになっており、また 1 階には Windows 起動のコンピュータ 9 台、Macintosh 1 台が設置されたコンピュータブースが設置されており学生が自由に使用出来るようになっている。

学生サロン「ぱうぜ」の 2 階にも Windows 起動のコンピュータが 10 台設置されており、インターネットの閲覧、本学図書館の蔵書検索が可能となっている。

F 号館には、Windows 起動のコンピュータが 37 台と 21 台が設置されたコンピュータ室があり、幅広い授業で利用されている。

図表 22 情報機器等の設置・整備・使用状況

分類	使用目的	教室名	設置機材の概要	使用頻度
パソコン設置	コンピュータ演習室	F212	Win 37 台 プロジェクタ+スクリーン	17/22
	コンピュータ演習室	F213	Win 21 台 プロジェクタ+スクリーン	1/22
	DTM 演習室	K118	Mac 24 台 + 教員用 1 台 プラズマモニター 2 台 MIDI 音源 MIDI 鍵盤 MIDI ピアノ	15/22
	MIDI テクノロジー演習室	K504	Win 20 台 + 教員用 1 台 MIDI 音源 MIDI 鍵盤	12/22
キーボード・システム	ML 教室	F313	電子ピアノ 21 台(模範演奏表示用モニター付き) 制御用 PC1 台	16/22
	ML 教室	K120	キーボード・シンセサイザー 41 台 大型モニター 2 台	21/22
パソコン設置	学習自習室	ぱうぜ	Win 10 台(ネット接続可)	-
	学習自習室	K号館 1階	Win 9 台 Mac 1 台(ネット接続可)	-

図表 23 学内 LAN の整備状況

サーバー（9台）	LAN 回線		PC	用途
Web	A 号館	学務事務部門	41 台	事務用
WebDB		エクステンション事務部門	5 台	学生用（就職活動他）
メール		教員集会室	2 台	教員用
ウイルスチェック		会議室		
プロキシ	C 号館	図書館	4 台	学生用（資料検索用）
ドメイン	D 号館	視聴覚室	2 台	学生用（資料検索用）
教育研究 DB	H 号館	教員研究室	32 台	教員用
学務システム	ばうぜ	1 階		
学生用電子掲示板システム		2 階	9 台	学生用（自習室）
	K 号館	音楽博物館	10 台	教職員用
		K502	1 台	教職員用
		K503		
		K504	20 台	授業用
		K215	1 台	教員用
		K118	25 台	授業用
		録音室	4 台	事務用（2 台） 録音関係（2 台）
		コンピュータブース	9 台	学生用（自習室）
	0 号館	管弦打研究室	2 台	教員用

教職員に対する情報機器の整備

各事務系統には学内 LAN の端末として概ね一人の事務員に 1 台のパーソナルコンピュータが設置されている。それぞれに設定されたアクセス権によって業務上必要な領域にアクセスできるようになっており、同一部門内ではそれらのファイルが共有できる状態が確保されている。また教員に対しては H 号館に設置される作曲、一般、教職、ソルフェージュ部会の各専任教員研究室、0 号館管弦打部会専任教員共同研究室にはそれぞれ学内 LAN の端末が設置可能な状態で用意されている。

学内 LAN は学内の事務連絡や行事予定等を確認できる状態にあり、学内における事務系の連絡等でも十分に利用されている。しかしながら、未だ紙媒体による文書や内線電話による連絡に頼っている部分があり、少なくとも書類を必要とする連絡等には学内 LAN の利用を推し進めたい。

各教員においてインターネットによる情報収集や研究などに使用されていることは勿論ではあるが、各種委員会や会議等の議事に関する情報や業務上の連絡等に積極的利用を推進している。

学内のサーバー内に教員個人の占有スペースを設け、常に学生に対してメッセージを発したり、社会的活動や研究についてもそのホームグラウンドたる大学より発信できたりする

状況が構築できることを目標としている。一元的に全ての教員に対して課するものではないが、一つのツールとしての情報機器の利用については全学的な指針が望まれるところである。

授業用の機器・備品の整備

・概要

本学では通常の講義や演習においても積極的に視聴覚に訴える授業内容を取り入れているため、これらの授業で使用される教室（50 教室）ほぼすべてに AV 機器（CD・LP・LD プレーヤー、VTR、大型モニター）およびグランドピアノが設置している。

演習室としては主に合奏等大規模な人数による演習科目で使用する部屋として、中・大教室を D 号館に 1 室、F 号館に 1 室、O 号館に 3 室、中規模のアンサンブル用演習室として F 号館に 1 室、K 号館に 3 室、O 号館に 3 室設置している。このうち O 号館の合奏用演習室には懸架式のマイクロフォンを備えた録音設備を常設し、簡易な録音等が可能な状態となっている。また F 号館大教室（F434）にはスポットライトや調光卓を備えた簡易な照明設備があり演劇や演奏会にも対応している。K 号館には 2 階にあるジャズ・アンサンブルの演習室（ドラムセット、ピアノ、キーボードを備える）2 室に加えて、2002 年春、同館 1 階に新たに 8 室の練習室が設置された。その内、6 室にはキーボード、アンプ、スピーカー、CD・MD デッキが設置されており、2 室にはドラムセットと CD・MD ラジカセが設置されている。このほか音響・照明システムを備え、舞台機構の学修も行えるように P 号館内に音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」も用意されている。ミレニアムホールについては別項にて詳細を示す。この他に、O 号館旧体育館をミュージカル・コース及び大学院のオペラ専用の教室として使用している。これらの教室は通常授業での使用のほか、学生による自主練習、研究活動においても事前申し込みにより自由に使用できるようになっている。

・独自の施設を備える教室

器楽専攻ピアノを除く全ての学生が選択可能な専門科目として開講している副科鍵盤楽器演習では ML（Music Laboratory）システムを備えた特別教室を使用する。このシステムは語学における LL（Language Laboratory）を応用したもので、教員用デスクで集中管理されている 20 台の電子ピアノをベースにヘッドフォンとマイク、手許の液晶モニターを介して教員との 1 対多の双方向通信指導を可能としている。これによってクラス授業の形態をとりながらも、個人の学修状況に応じて個別に課題を与え、他の音に干渉されること無く練習でき、且つ、教員からの指示も個別に出せると言う鍵盤楽器指導の画期的且つ本学独自の学習システムとなっている。本学ではこのシステムを有効に利用し、特に入学前に鍵盤楽器に親しみの少なかった学生に対して教育効果を上げている。

・授業用の機器・備品の整備に関する今後の改善点

本項にて示したように、本学では、ほぼ全ての教室にピアノを設置し、多数の教室に視聴覚システムを備えるなど、音楽大学の施設としては十分なものを保有していると自負するものではあるが、大講義室は設置しておらず、通常授業においては最大百数十名程度の収容が可能な大教室を備えている。これについては特別に授業運営上の問題とは

なっていない。少人数にも関わらず広い教室を使用せざるを得ない状況もあるため、教室の規模がカリキュラム編成上全て適切なものとなるようにしていきたい。また必然的に音を発する授業も多く、練習室を含め防音対策には特に取り組んでいる。しかしながら隣接する教室間で互いに音が干渉するなどの問題は少なからず存在しており、施設の改良もさることながら使用教室の振り分けに一層の配慮が必要でもある。

練習室

本学は音楽系単科の短期大学として最も重視されるべき学生の自学自習＝演奏活動やその練習、研究、発表などを支援するために第1キャンパス、第2キャンパスを合わせて176室の練習室を確保している。(その内訳を図表24に示す。)この練習室には全室ピアノを設置しており、さらに本学が設置する多彩な専攻に応じ、パイプオルガン、電子オルガン、シンセサイザー、チェンバロ等が設置されている部屋も保有している。このように自宅練習が困難な専攻の学生に対して自主練習の便宜を図っている。

また、専攻する楽器等の特性を考慮し、特に一般的な家庭で練習することが困難であったり、楽器の運搬や個人的に用意することが容易でないものが多い管弦打楽器のために専用の練習棟として0号館を設置した。ここでは特にアンサンブルなど複数の学生が合同で練習する機会が多いこともあり、すべての練習室は小規模の室内楽練習に対応する空間を確保し、多種多様に互る演奏形態にも対応している。これらの練習室は近接する部屋同士の音が干渉しないように防音設備と個室単位で調整可能な空調設備を備える。また大型の楽器を扱う打楽器を専攻する学生の練習には楽器の移動を伴うため、楽器運搬用の大型エレベータを設置している。この他、学生が個人的に購入するのは容易でない特殊な楽器など本学で所有する管弦打楽器はこの0号館内に保管され、専用の窓口を用意し、日常的な使用に柔軟に対応しつつ一括管理している。

練習室の貸し出しは、E・F・G号館についてはA号館学務センターで、K・O・P号館についてはそれぞれ各施設の事務室を窓口として受け付けている。学生が利用にあたっては申し込み順に貸出しを受け付け、一人の使用時間を原則的に1時間30分(K号館は2時間)とし、状況に応じて時間の延長も可能としている。練習室の質・量としては一般的に見て充実しているものと思われるが、単に短大において自学自習するという目的に限らず、専門とする実技によっては音量、楽器の大きさなどの物理的理由により自宅学習(練習)が困難なケースが少なからずある。特に前述したように管弦打楽器を専門とする学生には楽器の可搬性や音量などを考慮し、専用の練習室として0号館練習室を充てているが、近年の管弦打楽器を専門とする学生の増加によって一人の学生が1日に練習室を使用できる時間数に制限があり、十分な練習時間を確保できない場合もある。特に実技試験前など多くの学生が集中して練習を行う場合にはこの傾向が顕著であり、場合によっては正規授業の始業1時間以上も前に登校し練習室の予約のために並ばなくてはならないという状況も見受けられる。これらについて効率的な運用方法等の策定が求められる。

図表 24 各施設における練習室数

(2004年5月1日現在)

	1階	2階	3階	4階	5階	小計
E号館	-	-	8	-	-	8
F号館	4	-	9(4)	28	9(2)	50(6)
G号館	-	5	5	-	-	10
K号館	22	-	5	-	1	28
O号館	2	8	20	-	-	30
P号館	-	25	25	-	-	50
合計			-			176

・通常の学生の申し込みにより使用可能な個人用の練習室、演習室を除く。

・()は短大専攻科、学部専攻科、大学院専用の練習室として確保している部屋数。

3. 機器・備品の管理の状況、整備計画

授業や練習、演奏会に使用するための楽器を多数揃え、学生個人への貸出しも行っている。グランドピアノや電子オルガン、チェンバロ等の鍵盤楽器が約800台、クラリネットやヴァイオリン、ティンパニ等の管・弦・打楽器が約500点、箏・三絃等の邦楽楽器やリコーダー、古楽器等の合奏・アンサンブル用の楽器が約850点用意されている。

ピアノの調律は定期試験や入学試験前以外にも複数のグループに分け数ヶ月に一度の割合で定期的に行なわれており、可能な限り整った状態で使用できる状況を保っている。また学生による合奏等で使用する楽器については個人による購入が困難である大型管楽器や弦楽器、ハープや打楽器などはそれら楽器を専門とする学生に無料で貸し出している。専門以外の学生には専門学生が使用するものとは別に楽器が用意されており、これらの楽器は打楽器を除き有料で年間を通じて学生個人に貸し出している。またピアノを除く貸出用楽器はその特殊性・専門性を考慮し故障や点検など必要に応じて専門店等に依頼し保全に勤めている。

各教室の機器整備は管理事務部門管財担当がこれに当たり、教員や学生からの要望を反映して年度毎の計画を立てている。また、日々の整備は管財担当が必要な教室を巡回し機器のチェックをし、電源を入れて授業開始の際に戸惑いのないようにセットしている。

授業用の機器については音楽大学にとって必要かつ十分なものを保有していると言えるが、学生の利用数も相当数あり、その為に整備・点検を行う必要頻度も高いものとなる。耐用年数を越えたものは定期的に入れ替えるなどの措置も講じ、全てについて常に最上の状態を維持するように努力している。

4. 校地・校舎の安全性

本学の校舎では、防火管理体制を整備し、豊中市南消防署に消防計画を届出ている。また、現在これに基づき「大阪音楽大学自衛消防隊規程」を策定中である。消防設備に関しては、防火扉や火災警報装置をはじめ、各校舎の4階以上の高層階にある教室には非常用シューターを設置し、これらは毎年度に定期検査を行っている。

音楽教育機関である特徴として、多くの授業、レッスンにおいて楽器を使用することとなる。これは学生の個人レッスンでも同様の事が言えるが、本学においてエレベータが設置されている校舎はK,0,F号館であるが、学生自身による楽器の移動が頻繁におこなわれる管弦打専攻の学生は0号館が活動の中心としており、特にここでは重量の大きい打楽器等の移動を考慮したエレベータを設置している。同様にジャズ・ポピュラー専攻はK号館が中心となっている。このように本学ではエレベータ設置の校舎を有効利用している。また雨が降った時には、校舎の入り口に傘入れの袋と専用のごみ箱が設置される。これは校舎内を少しでも清潔に保つとともに安全確保の為の方策である。

学生用のロッカー（鍵付き）は、複数の授業を持つ学生にとって、教材等の保管に役立っている。耐震性については各校舎について順次補修工事を行っている。

本学の建物のうち最も高層となるのはF号館5階建てであるが、比較的年齢の高い教員にとっては教室間の移動時に不便を感じる場合もあるようである。また、やや急な階段や十分な幅を持たない階段もあり、今後の改善が必要といえる。

第3節 図書館・学習資源センター

1. ザ・カレッジ・オペラハウス

1989年、本学創立70周年記念事業の一環として竣工した日本初のオペラハウスであり、専属の管弦楽団、合唱団を擁し、オペラ、管弦楽団・合唱団定期演奏会、室内楽など年間を通じて多彩な催しを行っている。建築概要は敷地面積 3,609.39m²、建築面積：225593m²、延床面積：5489.39m²であり、階数：地上7階、地下2階、残響時間：12～1.4秒（満席時）となっている。客席は756席（オーケストラ・ピット使用時：652席）で、舞台の広さは580m²、後舞台48m²となっている。専属の管弦楽団、合唱団を擁し、オペラ、管弦楽団・合唱団定期演奏会、室内楽など年間を通じて多彩な催しが行われている。オペラは、7月のサマー・オペラ「モーツァルト・シリーズ」と、2001年11月からスタートした「20世紀オペラ・シリーズ」と合わせて年2回の公演が行われている。オーディションによって在学生の出演を募る企画も実施されている。募集要項は学務センター（A号館1階）より案内している。学生自治団体のオペラハウス使用については学務センターを経てオペラハウス事務局への申し込みが必要となっている。

本学主催のオペラハウスでの催し物の案内及び、入場券の扱いは全てチケットOCM（大学正門前）で行っている。また催し物の広報は、年9回刊行する大阪音楽大学広報誌「Muse」（ミューズ）催し物案内板（H号館1階東側、チケットOCM内）、A号館1階ロビー配布のチラシ、ネットボード・インフォメーション（学生サロン「ぱうぜ」1階、2階、0号館1階、K号館1階）、学内放送（授業期間中の月～木 昼休み）にて行っている。

音楽を学ぶものにとって、その学習は限られた空間（レッスン室や練習室）や机上（授業）の理論のみに終始するものでないことは至極当然の事実である。音楽大学である以上、学生の発表の場を多く催し、その際、学生たちの経済的負担や物資の移動などに掛かる物理的負担などを軽くすることもまた理想である。本学はこの点で、演奏会場として優れた機能を持

ち、単なる講堂やホールといった概念を越えた音楽専門ホールである “ザ・カレッジ・オペラハウス” を有していることは、本学の建学の精神や教育理念を具現化するものである。数年前まではこのオペラハウスを本学在学生在が使用できる機会が非常に限られており、その当時の学生や卒業生から併設される音楽学部（四年制大学）との不公平感を訴える声が少なからずあった。本学ではこれらの声に応えるとともに学生の学習意欲の向上を図るため、短大独自の演奏会を企画するなどし、年を追う毎にこの舞台に立つ機会を増やしてきた。現在ではオペラハウスにおいて開催する演奏会のうち本短期大学学生が主体となるものとして、本学の在在学生からオーディションによって優秀と認められた者が出演するジュニア・カレッジ・ソロ・コンサート、ジュニア・カレッジ・アンサンブル・コンサート、定期演奏会などがある。このほか、通常授業の延長上の発表会として、邦楽演奏会、合唱演奏会、短期大学部吹奏楽演奏会、大阪音楽大学短期大学部卒業演会があり、このほか学生に自主公演として規模の大きなアンサンブルの発表会（年数回）などが行われている。このように本学の学生にとってオペラハウスの舞台に立つことが一つの大きな目標となるよう図っている。オペラハウス管弦楽団定期演奏会やオペラの上演、ゲストや内外で活躍する本学教員、卒業生などが出演する推薦演奏会といった、上質の芸術を鑑賞し、間近に触れる機会の提供のみに留まらず、音楽を専門的に学ぶものが、実際に創作・発表する機会を提供し、出演すること自体にも一種のステータスを与えているという意味で、学生に対する学習支援として大きな役割を果たしている。これは音楽に特化した優れた施設を持つ専門教育機関としての本学の特長である。

オペラハウスにおける 2004 年度の演奏会実施状況を図表 25 に示す。

図表 25 オペラハウスの演奏会実施状況（2004 年度）

開催日	主催	公演名	出演者数	担当事務部門
2004年11月18日	短大	第11回 ジュニア・カレッジ・ソロ・コンサート*	学生15名	学・演担当
2004年11月19日	短大	第11回 ジュニア・カレッジ・アンサンブル・コンサート*	学生24名	学・演担当
2004年11月25日	大学・短大	第27回 邦楽演奏会	学生8名 教員4名 教育助手1名	学・演担当
2004年12月16日	短大	第13回 短期大学部定期演奏会*	学生ソリスト1名 学生（オーケストラ）69名 教員3名 教育助手3名	学・演担当
2005年1月15日	大学・短大	合唱演奏会	学生280名 教員2名 教育助手3名 客演1名	学・演担当

2005年2月19日	短大	第10回 短期大学部吹奏楽演奏会	学生ソリスト1名 学生(吹奏楽) 129名 教員2名 教育助手1名	学・演担当
2005年3月20日	短大	大阪音楽大学短期大学部 2004年度卒業演奏会 第1夜	学生28名	学・演担当
2005年3月21日	短大	大阪音楽大学短期大学部 2004年度卒業演奏会 第2夜	学生作曲出品者1名 学生演奏者28名	学・演担当
2005年3月23日	短大	ファイナル・コンサート	学生8名 教員13名 客演3名 演奏員3名 教育助手14名	学・演担当

* 事前にオーディションを実施、学・演担当：学務事務部門の演奏担当による受付

2. 音楽ホール型大教室「ミレニアムホール」

2000年9月に竣工した音楽ホール型大教室であり、P号館内に位置し、音響、照明など学生自身が実践を通して舞台機構が学修できるようになっている。

座席数：302席（可動席62席使用）、舞台スペース：約106m²、残響時間：約1.7秒、二重屋根、二重壁構造を採用し、外部騒音を遮蔽、空調の消音化にも努め「質の高い音楽空間」を創出する空間となっている。本学主催の演奏会、授業延長上の発表会の他に、生涯学習の場として、レクチャーコンサートを年4回の特別講座として本ホールにて行っている。

施設利用対象者は、本学学生、本学教職員、本学幸楽会会員、本学が認めた学会、研究会等となっている。また利用の際の問い合わせは、学務センター（A号館1階）において受け付けている。

このミレニアムホールは主に学生の自由な発表の場として提供されている。本学が主催する演奏会として、ミレニアム・スチューデント・コンサートや公演をはじめ、学生有志による独奏やアンサンブルの研究発表、個人レッスンの延長上にある門下発表会など年間約60回催されている。ある種のステータスであるオペラハウスと対になるホールといえ、特に学生の自主公演においては演奏のみでなく、企画、準備の段階から演奏会当日の運営までも学生によって行われ、簡易な調光、音響までも学生自らの手で行うことも可能な実地実践学習の場としての役割を果たしている。

さらに上記2つのホールにおいて行われるコンサートに係るオーディションへの参加は益々盛んになってきている。本学の専門教育における効果向上、学習への支援強化の結実とも言えよう。

ミレニアムホールにおける2004年度の併設大学と合わせた利用状況を図表26に示す。

図表 26 ミレニアムホールの利用状況（2004年度）

開催日	団体名又は申込者・部署	催事名称
2004年4月5日	学務事務部門・学生生活担当	奨学金説明会
2004年4月6日	学務事務部門・学生生活担当	奨学金説明会
2004年4月10日	サクソフォン専攻生有志	SPRING CONCERT
2004年4月20日	インフィニート	SPRING コンサート
2004年4月26日	学務事務部門・教学担当	舞台研究 A・B ホール見学
2004年4月30日	オペラ研究部	オペラ研究部 春の試演会 「フィガロの結婚」
2004年5月8日	サクソフオーン専攻2回生	サクソフオーン専攻2回生有志による演奏会
2004年5月12日	学務事務部門・教学担当	短大音楽専攻企画授業「近年のポピュラー音楽……」
2004年5月22日	学務事務部門・教学担当	D. ハンスパーガー氏吹奏楽特別講義
2004年5月24日	学務事務部門・演奏会担当	第3回 ミレニアム・スチューデント・コンサート
2004年5月29日	長門 由華	クラリネットコンサート2004
2004年5月31日	学務事務部門・演奏会担当	第4回 ミレニアム・スチューデント・コンサート
2004年6月15日	学務事務部門・教学担当	短大音楽専攻企画授業「ミュージカルの出来るまで」RH
2004年6月16日	学務事務部門・教学担当	短大音楽専攻企画授業「ミュージカルの出来るまで」
2004年6月21日	学務事務部門・教学担当	短専「コンサート・プロデュース」演奏会 RH
2004年6月25日	バリ・チューバ Jr アンサンブル	バリ・チューバ Jr アンサンブル
2004年6月28日	学務事務部門・演奏会担当	第5回 ミレニアム・スチューデント・コンサート
2004年6月29日	学務事務部門・演奏会担当	第6回 ミレニアム・スチューデント・コンサート
2004年7月2日	眞声会	Vocal Concert
2004年7月7日	トロンボーン Jr アンサンブル	トロンボーン Jr アンサンブル
2004年7月10日	学務事務部門・教学担当	短専「コンサート・プロデュース」演奏会
2004年7月12日	トランペット専攻1,2回生	第6回 Jr. トランペットアンサンブル
2004年7月31日	学務事務部門・教学担当	短専「コンサート・プロデュース」演奏会
2004年9月17日	学務事務部門・教学担当	ジュニア・カレッジ・ソロ・コンサート オーディション
2004年9月22日	篠原門下生	篠原門下発表会
2004年9月24日	ユーフォニアム専攻生有志	第7回 ソロコンサート Euphonium colors
2004年10月1日	トロンボーン専攻生有志	トロンボーン専攻生による自主演奏会
2004年10月7日	エクステンション事務部門・就職担当	2005年度 進路ガイダンス（短大1年生）
2004年10月18日	清水光彦門下	清水門下発表会
2004年10月20日	学務事務部門・教学担当	短大音楽専攻企画授業「カステル・ニヌオーボ……」
2004年10月25日	中村門下 COPINE&COPINE	COPINE&COPINE
2004年10月27日	学務事務部門・教学担当	短大音楽専攻企画授業「ソロピアノのための……」
2004年10月28日	坂口菜里門下生	坂口菜里門下発表会
2004年10月30日	学務事務部門・学生生活担当	学生自治会 大学祭公演
2004年11月2日	福島門下	福島慶子門下発表会
2004年11月6日	短期大学部ギター専攻生	短期大学部ギター専攻生による自主演奏会

2004年11月8日	学務事務部門・演奏会担当	第7回 ミレニアム・スチューデント・コンサート
2004年11月11日	草野道広門下生	研究発表会(声楽)
2004年11月16日	学務事務部門・教学担当	短大音楽専攻企画授業「ミュージカルの出来るまで」RH
2004年11月17日	学務事務部門・教学担当	短大音楽専攻企画授業「ミュージカルの出来るまで」
2004年11月20日	飯守門下生	飯守門下発表会「Investigete」
2004年11月26日	学務事務部門・演奏会担当	第18回 新作展
2004年11月27日	学務事務部門・演奏会担当	邦楽合奏発表会
2004年11月29日	学務事務部門・教学担当	Let it be~短大専攻科合奏A室内楽研究
2004年12月5日	学務事務部門・演奏会担当	第40回 短大連合音楽会
2004年12月10日	小玉門下生	Klassen abend
2004年12月20日	松田門下	松田昌恵門下声楽勉強会
2004年12月21日	芝田眞理門下生	芝田眞理門下生による Vocal Concert
2004年12月22日	谷川門下	谷川門下発表会
2004年12月27日	新川・藤原門下	新川・藤原門下発表会
2004年12月28日	小池門下	小池輝美門下発表会
2005年1月15日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年ピアノ公開卒業試験
2005年1月17日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年ピアノ公開卒業試験
2005年1月18日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年ピアノ公開卒業試験
2005年1月19日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年ピアノ公開卒業試験
2005年1月20日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年ピアノ公開卒業試験
2005年1月21日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年ピアノ卒業演奏会出演者オーディション
2005年1月24日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年声楽公開卒業試験
2005年1月26日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年管弦打公開卒業試験
2005年1月27日	学務事務部門・演奏会担当	短大2年管弦打公開卒業試験
2005年1月29日	学務事務部門・教学担当	2004年度短大2年音楽専攻ピアノ卒業試験
2005年2月10日	オペラ研究部	オペラ研究部発表会
2005年2月12日	藤井 司郎	ジャズ・ポピュラー専攻 授業成果発表会
2005年2月14日	学務事務部門・演奏会担当	第8回 ミレニアム・スチューデント・コンサート
2005年2月17日	学務事務部門・演奏会担当	短大専攻科ピアノアンサンブル発表会
2005年2月18日	Tannive 2004	Tannive2004「フィガロの結婚」RH
2005年2月19日	Tannive 2004	Tannive 2004「フィガロの結婚」
2005年2月21日	ホルン Jr アンサンブル	ホルン Jr アンサンブル
2005年2月22日	Buon-giorno	Buon-giorno
2005年3月14日	大阪音楽大学短大専攻科	短大専攻科有志による自主演奏会(第1夜)
2005年3月15日	大阪音楽大学短大専攻科	短大専攻科有志による自主演奏会(第2夜)
2005年3月17日	Brass Quintet	Brass Quintet - Friendly concert -
2005年3月18日	SoLongo Family	ソロンゴ チャリティーコンサート
2005年3月28日	A - Muse	A - Muse

併設教育機関と共通。

3. 図書館

付属図書館は併設教育機関と共用し（以下全てのデータについて同じ。）C号館（1階）D号館（1階）に位置し、C号館1階には、総合受付カウンター、閲覧室（198.00m²）教員閲覧室（3.70m²）D号館1階には、視聴覚受付カウンター・視聴室（LP・CD・カセットテープ視聴20ブース）（39.70m²）・視聴覚室（DVD・LD・ビデオ視聴11ブース）（51.12m²）教員視聴室・第2閲覧室（11.36m²）を設置している。書庫スペースはC号館、D号館、K号館に設置されておりそれぞれ133.20m²、102.24m²、15800m²となっている。C号館の閲覧室に学生用102卓5席、教員閲覧室に教員用3席、2階書庫内に教員用4席となっている。またD号館には視聴室に33ブース、視聴覚室に28ブース、教員視聴室に6ブース、第2閲覧室に6ブースが設置されている。司書数は1名である。

現在、文献資料として内外の音楽書・一般書及び楽譜など約128,000冊（楽譜：41,000点）にのぼる蔵書と、視聴覚資料として約49,900枚のレコード、CD、LD、ビデオテープ、DVDその他を備えている。図表27に2002～2004年度の蔵書・資料数の総計、図表28に年間受入数、年間除籍数を示す。図表29にはそれぞれ2002～2004年度の雑誌・研究紀要の変動を示す。図表30には視聴覚資料内訳とその変動を示し、図表31には2002～2004年度の図書・資料にあてられた予算・支払額を示す。

付属図書館資料費・事務費ともに、2002年度以降、予算額及び支払額は縮小している。特に2004年度に大幅な減少を行っており、和書及び視聴覚資料の受入数の減少として表れている。その一方で、図書（洋書）の受入数は大きく増加している。また、図書館の入館者数も年々増加傾向にある。現段階において、必要な図書・資料の選別が上手く行なえるように改善されたと言えるのではないだろうか。今後もより効果的に予算を利用できるように利用状況を注意深く見守っていきたいと考えている。

本図書館の利用時間は月曜日～金曜日は9:20～18:00（授業期間外は16:50）、土曜日は9:20～13:30となっており、卒業生・一般の方々の利用（複写・閲覧のみ）も可能となっている（一般の方で利用希望の方は、事前に図書館に連絡が必要）。休館日は日曜、祝日・振替休日、年末年始（12月29日～1月6日）、本学の創立記念日（10月15日）、推薦・一般入学試験期間、蔵書点検整備期間となっており、臨時の閉館については、その都度あらかじめ掲示している。また、学生が所持しているCampus Lifeにも図書館開館期間が記述されている。

付属図書館の利用範囲は図書・楽譜・新聞・雑誌（バックナンバーを含む）の館内閲覧、図書・楽譜の館外貸出し、図書館資料の文献複写（著作権法に基づく）LP・CD・カセットテープの試聴（試聴室D号館1F）DVD・LD・ビデオの視聴（視聴覚室D号館1F）となっている。講義科目についてはほとんど開架方式で利用できる図書としているし、対応している。但し、専攻が新設後間もないこともあって、ジャズ・ポピュラーに関しては鋭意収集中である。また漫画雑誌、各種一般マニュアル書、それに類した図書は購入していない。定期試験など特定の時期には満室になるほど利用度は高いが、それ以外の時期は半分くらいの席が利用されている。視聴覚室の利用度は待ち時間を要するほど利用度は過剰である。

利用に際しては、入学時に配布するバーコード付き学生証が必要となり、卒業後の利用に

は幸楽会会員証の提示を求めている。視聴覚資料の利用等については、閲覧室カウンターに図書館利用案内が常備しており、利用者への案内を行っている。

図書館で購入してほしい資料があれば、カウンターに備えてある希望カードに所定事項を記入、提出された後に、図書重複等をチェックのうえで、選書基準に基づき館長が最終選択を決定している。なお、発注～受入～整理については、図書システム(CALIS)で対応している。本図書館は、私立大学図書館協会と音楽図書館協議会(MLAJ)に加盟しており、本学教職員・在学生は、加盟館での閲覧、所蔵調査及び相互貸借ができるようになっている。またOPAC(Online Public Access Catalogue)検索システムで図書館資料の検索が可能となっている。

図書等の廃棄システムについては、資料構成の方針に基づき、基準(1:研究教育上その価値が失われ、又は有害であると認められる資料、2:本学内の会計単位を異にする他部課への移管が認められた資料、3:組替(数量更正)を必要とする資料、4:本学外への寄贈が確定した資料、5:亡失が確定した資料、6:欠損・汚損のため復元不可能になった資料、7:その他、利用又は管理が不相当と認められた資料)に照らし合わせて館長の許可によって廃棄処理を行っている。

図書・資料の情報化の進捗状況は、2002年度にスタートした「教育研究データベース構築プロジェクト」により図書・視聴覚資料の貸出返却のIT化に並行して学内保有資料のデータベース化を行っている。図書館保有資料については2008年度中に完了する予定である。

図表 32 に図書館の利用状況として、2002～2004年度の入館者数の一覧を示す。この図表が示すように入館者数は、年々増加の傾向となっている。図書・資料が教育研究活動に及ぼす影響は言うまでもなく大きく、拡大解釈すれば図書・資料の充実化に研究・教育活動が触発されることも考えられる。しかしながら、図書館の情報源的役割の将来性は多くの障害があり、その問題点を解決しなければ先行きに不安を感じている。例えば、地域社会への貢献を取り上げても、地域住民が図書館をどのように利用するのかという意識調査等が必要であり、図書館側からも広報活動・啓蒙活動を通して、図書館についての相互理解を構築しておかないと正当な情報源とはなりえないであろうし、他の図書館との連携についても、それぞれの図書館の独自性についての相互理解がなければ、円滑な連携利用の場の構築は簡単なことと考えられない。

図表 27 蔵書・資料総計(2002～2004年度)

年 度	図 書					視聴覚資料
	一般書		音楽書・楽譜		総 計	
	和 書	洋 書	和 書	洋 書		
2002	32304	18917	30451	43191	124863	47035
2003	32951	19018	31459	43719	127147	48971
2004	33227	19137	31994	44502	128860	49978

単位：図書(冊)・視聴覚資料(件)

図表 28 蔵書・資料の変動（2002～2004年度）

年 度	図 書				視聴覚資料		
	年間受入数		年 間 除籍数	差し引き 合 計	年 間 受入数	年 間 除籍数	差し引き 合 計
	和 書	洋 書					
2002	1803	517	941	1379 増加	1840	3	1837 増加
2003	1828	652	196	2284 増加	1940	4	1936 増加
2004	961	939	187	1713 増加	1020	13	1007 増加

単位：図書（冊）・視聴覚資料（件）

図表 29 雑誌・研究紀要の変動（2002～2004年度）

年 度	雑 誌				研究紀要			
	年間受入数		年 間 除籍数	差し引き 合 計	年 間 受入数	年 間 除籍数	差し引き 合 計	所 蔵 累 計
	和 書	洋 書						
2002	128	67	0	195 増加	566	0	566 増加	687
2003	135	64	0	199 増加	598	0	598 増加	707
2004	135	60	0	195 増加	581	0	581 増加	713

単位：図書（冊）・所蔵累計（種）

図表 30 視聴覚資料内訳とその変動（2002～2004年度）

	2002 年度	2003 年度	2004 年度
レコード	18077	18077	18087
C D	22778	24380	25200
カセットテープ	202	204	194
ビデオテープ	2724	2804	2821
L D	1722	1722	1721
スライド	15	15	15
マイクロフィルム	574	575	575
マイクロフィッシュ	500	500	500
C D-R O M	27	28	28
D V D	416	666	837
合 計	47035	48971	49978

図表 31 図書資料費・事務費の状況（2002～2004年度）

種 類	予算項目	2002 年度	2003 年度	2004 年度
図書館資料費	予算額合計	27,390,000	23,000,000	17,000,000
	支払額合計	21,230,586	20,513,190	16,735,512
図書館事務費	予算額合計	11,955,000	13,500,000	15,030,000
	支払額合計	14,399,551	14,055,960	11,794,299

図表 32 図書館の入館者数（併設教育機関との合計数 2002～2004年度）

年 度	施 設 区 分	教職員	学 生	その他	合計 (人)
2002 年度	C号館	3,339	35,135	1,407	39,881
	D号館・試聴室・視聴覚室	3,952	21,472	864	26,288
2003 年度	C号館	3,700	35,808	1,248	40,756
	D号館・試聴室・視聴覚室	5,495	27,548	889	33,932
2004 年度	C号館	4,115	37,435	1,716	43,266
	D号館・試聴室・視聴覚室	6,080	32,652	1,049	39,781

4. 音楽博物館

本学は開学以来の研究成果や資料の蓄積と、これらの研究に伴い蒐集された歴史的な楽器や楽譜等の管理、保全を目的に音楽博物館を保有している。この音楽博物館は第2キャンパス(K号館)内にあり、2002年度より、旧 附属楽器博物館と旧 音楽研究所(音楽文化研究室・民族音楽研究室)が合併し、総合的な音楽資料の音楽博物館となった。当館では、下記3分野の研究と関係資料の収集を行っている。

楽器展示室には、サントリー弦楽器コレクションが常時展示されている。これは1999年にサントリー株式会社より寄贈を受けた弦楽器、及びその付属品から成るコレクション(弦楽器42点、弓22点、その他12点の計76点)であり、ストラディヴァリのピッコロ・ヴァイオリンやガスパロ・ダ・サロ制作によるヴィオラ・ダ・ガンバ等の逸品を含んでいる。また、2004年4月には、本学の創立者、永井幸次初代校長の記念コーナーが設置された。このコーナーでは、関西における洋楽教育の先駆者として生きてきた永井幸次の年譜、教材用に作曲した合唱曲等を収めた楽譜、愛用のオルガン等が展示されている。図表33に所蔵資料の一覧(2004年度時点)を示す。また、博物館資料のデータベース化も2005年度には着手しており、同じく2008年度中には完了する予定である。また、将来的にはウェブ上にこのデータベースを公開することも構想している。

これら楽器展示室の他に、レファレンス・ルームを新設し、所蔵資料(図表33)と、各種レファレンスに対応している。またミュージアム・コンサート、セミナー、ワークショップを開催している。開館時間は、月曜日～金曜日10:00～16:00(祝祭日、本学の休日を除く)で月1回程度、土曜日(10:00～13:00)に開館している。また、学生が所持しているCampus Lifeにも博物館の開館期間が記述されている。開館期間、年間の行事は本学ホームページでも案内を行っている。

このように貴重な資料を多く保有する音楽博物館は一般にも開放され、様々なレクチャーなどを行い広報に努めているが、本校校地より離れており、また最寄駅からのアクセスが良くないこともあり、利用にあたり若干の障害となっていることは否めない。この状況を改善するために同じ附属機関であるザ・カレッジ・オペラハウスとの連携や、学外施設との共同など様々な方策が期待される。

- 音楽博物館における研究内容 -
- ・世界の楽器と音楽に関する研究

世界各地の楽器と音楽に関する資料から、それぞれの民族の音楽文化について研究。

・ 関西の洋楽史に関する研究

日本人が異文化である西洋音楽を受容してきた経緯について、特に、本学が立地する関西での状況を研究。

・ 関西の民俗音楽に関する研究

大阪の「天神祭」に始まり、順次、瀬戸内海沿岸地域の同祭に関する芸能などの調査・研究。

図表 34 に博物館における、2002～2004 年度の入館者数一覧表を示す。この図表が示すように入館者数は年々増加の傾向となっている。

図表 33 音楽博物館所蔵資料（2004 年度時点）

楽 器	約 2,300 点
書 籍	約 11,000 点
視 聴 覚 資 料	約 6,000 点
関連研究領域の論文等	約 5,000 点
関西の民俗音楽に関する一次資料	約 14,000 点
関西の洋楽史（明治～現在）に関する一次資料	約 250,000 点
大阪音楽大学の歴史に関する資料	約 60,000 点

図表 34 博物館における入館者数一覧表（併設教育機関と共用 2002～2004 年度）

年 度	学 生	教職員	授業参加者	一 般	グループ見学	催事参加者	合計(人)
2002 年度	406	242	201	315	260	470	1,894
2003 年度	215	225	288	280	427	464	1,899
2004 年度	292	152	279	292	395	887	2,297

5. 録音スタジオ

録音スタジオは K 号館 2 階（K210）に位置し、完璧な遮音性と質の高い録音機材を設置している。その録音スタジオを利用し、録音実習系の授業や教員の研究のための録音を行っている。

6. ジャズ・ポピュラースタジオ

ジャズ・ポピュラースタジオは K 号館 2 階（K202）に位置し、設置されている照明や PA（Public Address）機材（音響機材）を使用し、自由なステージ作りができるジャズ・ポピュラー音楽特有の雰囲気をもったスタジオになっている。主にジャズ・ポピュラー専攻の授業や学生のライブ演奏に使用している。

特記事項

1. 外国人教員の採用と授業の公開

外国人教員の採用は、外国語科目、声楽専攻科目等に兼任教員を採用している。また、毎年、内外の著名音楽家等を招き特別講義として公開レッスンや講演などを行っている。図表35に2002～2004年度に学外音楽家を招き開催された公開レッスン・講義の開催状況を示す。これらの特別講義については学生のみならず本学の社会貢献の一環として一般にも公開されたものもある。

図表 35 学外音楽家を招き開催された公開レッスン・講義
(2002～2004年度 すべて併設大学との共催)

	日 程	講 師	対 象	内 容
2002 年度	4月26日	伊藤京子(声楽家)	V	日本歌曲の歴史(多方面からの考察)
	5月9日	ロバート・ヴァン・サイス(米国イェール大学打楽器科主任教授)	O	マリンバ現代曲の解釈について
	5月22日	ザ・カナディアン・プラス(プラスバンドグループ)	O	金管アンサンブルクリニックおよびミニ・コンサート
	5月22日	サム・ハミル(詩人) クリストファー・ブレイズデル(尺八奏者) カート・パターソン(箏奏者)	K	竹のこころ ~ アメリカの詩と邦楽のコラボレーション
	5月28日	マルティヌー弦楽四重奏団(弦楽四重奏団)	P	ピアノ五重奏曲演奏会
	5月29日	辛島文雄トリオ(ジャズトリオ) (辛島文雄・井上陽介・奥平真吾)	MJ	ジャズ演奏法
	6月19日	明石昌夫(音楽プロデューサー)	MJ, PV	音楽プロデュース論
	6月24日	三枝成彰(作曲家 東京音楽大学客員教授)	C	売れる音楽 是か非か
	7月8日	ベン・ヴァン・ダイク(バストロンボーン奏者・ロッテルダム高等音楽院教授)	T	独奏楽器としてのバストロンボーンについて
	7月15日	千原エイサー保存会(エイサー演舞団)	T	千原エイサー レクチャー & パフォーマンス
	10月8日	シュテファン・ゲンツ(声楽家)	PV	ヨーロッパの今
	10月28日	ハンス=ユルゲン・フォン・ボーゼ(ドイツ ミュンヘン音楽演劇大学作曲科教授)	C	自作品分析とヨーロッパにおける現代音楽の現状について
	10月30日	土岐英史・早間美紀ジャズカルテット(土岐英史・早間美紀・塩田哲嗣・江藤良人)	MJ	ジャズ演奏法
11月5日	ユージン・インジック(ピアニスト)	P	公開レッスン	

2003 年度	11月13日	ナタリー・シュトゥッツマン(声楽家)	V	公開レッスン(歌唱アドバイス)
	11月26日・27日	ローラント・ケラー(ウィーン国立音楽大学教授・愛知県芸術大学客員教授)	P	公開レッスン
	11月26日	ルイス・ナッシュ(ジャズ・ドラマー)	0	クラシック・ジャズ等のジャンルを超えた打楽器の演奏法
	12月3日	ジュリアン・ランドン(アメリカイーストマン音楽学校)	音楽療法	アメリカにおける精神科の音楽療法
	12月4日	ドナルド・ハンスパーガー(アメリカイーストマン音楽教授)	0	ウィンドアンサンブルについて
	4月28日	アンドレ・アンリ(トランペット奏者)	0	トランペットの独奏曲、奏法について
	5月15日	フィル・ウッズ(ジャズ・サクソフォーン奏者) エリック・ドニー(ジャズ・ピアニスト)	0,MJ	ジャズ演奏法
	5月22日	赤西正光(歯科医)	0	「歯」の基礎知識と日常のメンテナンスおよび治療
	6月17日	パスカル・モラゲス(パリ国立高等音楽院教授)	0	現代のクラリネット奏法と表現
	7月3日	辛島文雄・井上陽介・奥平真吾(ジャズトリオ)	MJ	ジャズ演奏法
	7月8日	カルロス・ガッラルド(ピアニスト)	P	ピアノ演奏について
	7月9日	明石昌夫(音楽プロデューサー)	MJ, PV	音楽プロデュース論
	10月14日	マクサンス・ラルリュ(国立ジュネーブ高等音楽院教授)	0	フルート独奏曲の演奏と解釈について
	10月22日	三和睦子(チェンバロ奏者)	T	バロックの室内音楽と通奏低音～J.S. バッハの作品を中心に～
	11月5日	スティーブン・ローチ(ローマ歌劇場コレペティートル)(東京芸術大学客員教授)	VP	コレペティートルの役割
	1月27日	ミシェル・アリニョン(パリ国立高等音楽院教授)	0	現代のクラリネット奏法
2月18日	ヤマハ(株)打楽器製作担当者	0	鍵盤打楽器の構造とメンテナンスについて	
2004 年度	5月10日・11日	パスカル・モラゲス(本学客員教授)	0	現代の奏法と解釈
	5月11日	モラゲス木管五重奏団	0	木管五重奏の分析と実践
	5月22日～26日	ドナルド・ハンスパーガー(ウィンドアンサンブル指揮者)	0	吹奏楽について
	4月9日～16日	ユージン・インジック(ピアニスト)	P	公開レッスン
	5月24日	ユージン・ルソー(サクソフォーン奏者)	0	クラシック・サクソフォーン演奏法
	6月9日	辛島文雄・井上陽介・奥平真吾(ジャズトリオ)	MJ, PJ	ジャズ演奏法

6月18日・25日・7月5日	中島警子（本学名誉教授）	K	箏合奏について組歌と邦楽曲分析について 箏独奏曲について
7月7日	野田暉行（東京芸術大学副学長）	C	自作品の軌跡と音楽の未来への展望
10月12日	斉藤 浩（スロバキア国立バンスカ ビストリツァ芸術アカデミー）	T	東西をつなぐ音 - ツィンパロンと そのふるさとハンガリーについて
10月26日	ウルフ・ローデンホイザー（ミュン ヘン国立音楽大学教授）	O	ブラームスの2曲のソナタ
10月28日	振津郁江（武庫川女子大学講師）	C	音楽と映像とパフォーマンスの融合 を求めて
11月13日	ライナー・セガース（ハンスアイス ラー音楽大学教授）	O	オーケストラにおけるティンパ ニーの役割について
12月10日・ 1月14日	今道友信（東京大学名誉教授）	全学	藤川正夫の詩を読む
12月13日・14日	ガブリエッラ・トゥッチ（声楽家）	V	公開レッスン
2月19日	土岐英史・江藤良人（ジャズ奏者 サクソ・ドラム）	MJ, JP	ジャズ演奏法～ジャム・セッションの 手法～
3月10日	ノーマン・シェトラー（伴奏ピアニ スト）	V	公開レッスン

対象欄記号 C：作曲、T：楽理（併設大学のみ）、V：声楽、P：ピアノ、O：管弦打、K：箏、
MJ：音楽専攻ジャズ、PV：ポピュラー・ヴォーカル、JP：ジャズ・ポピュラー